



図書館だより

上田女子短期大学附属図書館



L.Y.L と 図書館

図書館長 清水正男

今世紀のわが国の図書館の発展には三つの節が見られる。その一は再度の戦勝を記念し文化国家建設をうたって世紀の初期に設立されたいわゆる町村図書館の発展である。第二は昭和前期にL.Y.L（青年図書館員連盟）を中心とした若い図書館員のグループの結成と活躍、そして第三は、終戦後の民主的教育下での図書館の発展である。

その中で、とくに第二のL.Y.Lをここでとり上げる理由は、第一の町村図書館発展を継承しながらしかも困難な図書館事情下にあったの聯盟の活動と研究の展開が成果をあげ、終戦後のわが国の図書館発展に対して影響するところが大きかったからである。

青年図書館員聯盟L.Y.Lは昭和2年11月15日大阪方面の有志がわが国の図書館界の実情をうれい相はかって聯盟を設立し、宣言・綱領・規約などを全国の図書館界に発表、大阪の地に成立を見たのであった。爾来、その活動や研究の成果は、L.Y.L Bulletin 1218頁と、L.Y.L機関誌「図書館研究」の全16巻8916頁に書きとどめられている。その華々しい成果を残し解散宣言を世に発表、その多彩な活動を閉じ

たのが昭和18年6月22日であった。

L.Y.L結成当時のわが国の図書館の教育事情と、聯盟の持った活動や研究の成果はとくに戦後のわが国の図書館界の発展にとり価値あるものとして大きく影響を与えた。そして今日のわれわれにとっても重要な存在となっている。

またL.Y.Lが当時の図書館界の不備な点を指摘し是正しようとして果たせなかった点、およびさらに戦後の発展期を通じても尚はたせなくて今日にまで及んでいるものが存在するかどうかについても検討したい。そして残っているとすればどのようにこれに対処すべきであるかのストラテジーも考えなければならない。

L.Y.L結成当時のわが国の図書館事情は、機関誌「図書館研究」に見ることができる。宣言は「日本近代図書館創立以来既に五十有余年一般文化の進展につれて、わが国図書館事業も漸次発達した歩を進めたが、殊に最近数年間におけるその発達は目覚ましい飛躍的の歩度を示している。」としながらも「しかしながらこれを欧米先進諸国の状態に比較してみるときはなお前途甚だ遼遠の感なきをえない」一方「一般民衆の図書館に対する要求は刻々に熾烈さを加えつ

つある……図書館をして軋然たる民衆に対する『心の糧』の給与所たらしめ、真に精神文化のエルサレムたらしめること、これ今日及び次代におけるわが図書館作業者に課せられた歴史的使命]であるとする。したがって「この大使命を負えるわが国図書館作業者の多くが、あまりに晏如としてその伝統的象牙の塔に閉じこもり挙国一致協力をさえ図ろうとしないのは実に痛嘆の極みであって、今は徒らに袖手傍観すべきの秋ではない。」と述べ聯盟結成の急務を説く。「然り然るが故に先づ正当する認識を有する図書館員聯盟結成の必要はまさに焦眉の急を告げつつあるのではないか」として一刻の猶予も許されないとしている。

これは当時のわが国の図書館事情を述べた大毎の社説「御大典と図書館文部省に望む」(昭3.11.3)や「図書館と実用」(昭3.12.3)及び土岐善磨の「図書館見聞記」(東京朝日読書標第26号)などによって裏書きされるものである。

さて、L.Y.Lは規約中に事業として、機関誌の発行、研究図書出版、特殊問題講習、日本標準分類法および新目録法の制定、標準様式用品の選定、印刷カードの配給、日本著名索引編纂、関係法規改正運動、求人求職の紹介・周旋の9項をあげる。これは研究場の設定、研究成果の発表および相互支援の場の提供、図書館利用の諸toolの作製、図書館員のin-service trainingなどの4点にまとめられるが、さらに要約すれば、①研究場の設定、②図書館の標準化したtoolの完成、③図書館員のtraining、④研究の発表・交換の場の設定の四者ということになる。

これらのうち①③④についてはL.Y.Lのセンターが中心となり、ときに宿泊しての研究や16巻に及ぶ研究発表の機関誌発行がなされた。②のtoolの標準化は図書館資料の整理toolを主とするものでL.Y.Lの総力をあげて当たったものであるだけにその成地は顕著である。

整理の三大toolである分類のN.D.C、目録法のN.C.R、それに件名標目表のN.S.H(のちB.S.H)のいずれもがL.Y.Lの手により開発されている。中でもN.C.Rは和漢洋にわたる図書に適合するためのもので、他の研究諸団体のよくなし得られなかったものをL.Y.L独自の力で完成したものである。これらtoolの標準化は大毎社説や土岐論文など当時の世論側がとくにわが図書館界に要望したもの即ち図書館の奉仕機能的機能に該当するものである。したがってこの標準化の成功は戦後の図書館発展に大きく寄与している。もちろんこれで当時の図書館の諸課題のすべてが解決したわけではなかった。この事には特に注目したい。

既述の社説「図書館と実用」によれば「西欧の図書館は、日常民衆により利用され実生活と切り離せない必要物」なのに、わが国のものは「何となく文化的陳列棚の装飾物かもしくは一種の暇つぶしの娯楽機関」に過ぎず、「いかにしてその施設を実用的にし、自発的に自己の心を開拓してゆこうとする民衆を、積極的にひきつけ、利用させようというような新工夫に至ってはてんで念頭にならぬ」としている。そしてその解決に対しては「御大典と文部省」と同様にまず資料整理toolの標準化即ち奉仕機能的機能の充実を主張する。

L.Y.Lも図書館の現状の把握は同様であるものの「教師の説をノートし与えられた教科書の通読に追われてるくに図書館を利用せぬ学生、また晏如として図書館利用を図らせぬ図書館関係者の存在するうれうべき現象」を説き、「教壇教育—教科書の棒暗記を教育の全体と心得。これを実行しつつある今日の学校」の現状を訴える。さらに「図書館を完全な教育機関とするには現今の状態では到底満足ができないので閲覧者を指導教養せしむる係員を別に置かなければならないと思う」とするものをはじめ加藤竜太郎の「学生として見たるアメリカの大学図書館」

などわが国の図書館における後進性が実は図書館に起因するというよりもその背後にある教育方法の特異性にあると説明する。

民衆の知的生活はもち論、物的日常生活にまで密着している欧米の図書館とわが国のものを比較しその現状を嘆くのは既述の社説と同様である。しかし彼我の差異を解消する方途を教育全般の中の図書館しかもその指導機能の充実に置こうとする点に特色を見る。

もち論、L.Y.Lを含めた教育関係者の努力が結実し国民学校の国語読本の中に「図書館」課が新設されたことや、山形男子国民学校での学校図書館試行の指導が間宮によってなされた事など特筆すべきものが見られるものの指導機能など教者の本質についての根本的な検討に欠けている。

戦後の民主教育で図書館教育は法の裏付けをえて飛躍的な発展を示している。しかし如上の課題を全面的に解決して成果をあげているのだろうか。熟考を要する実状といえよう。

図書館の資料整理をはじめ奉仕機能の面では新しい試行が重ねられて行き、昨今は図書館教育の場にコンピューターまでもが導入され効率化が進行中である。それでは民衆に密着した図書館が奉仕・指導の両機能を兼備し教育の中核に入りすぐれた教育を実現しているであろうか。

コロンビア大学のM教授の教育学の指導では1単位12時間のクラスで各人の必読書360冊それらも大学図書館で読む。したがって終日図書館は満員である。これは米国でよく見られる姿である。キャンパスの中のこの姿と数百万冊の図書および無数の Non Book Materialsをもつ図書館を利用した私は「図書館は大学の附属物ではなく極端に言えば図書館に講義の方が附属し……学生は終日図書館、時々教室」と米国の大学教育全体の中の図書館の大切な位置づけの実状を紹介した加藤藤太郎の昭和初期の論文を今更のように想起した。

21世紀を迎えようとする今日 わが国のとくに生涯教育や高等教育では、常時人間の体内を血液が環流するように教育作用は自主的に自己の責任において一瞬も休みなく行わるべきとされる。そこでは図書館の質的发展、図書館を含む教育の革新的发展が望まれる。そのための有効かつ速効的のストララージの発見は困難であり、ユーザーの人格形成に有効に奉仕する方途の実施の前途に多難も予想されるであろうが今日の教育の果さなければならぬ課題と言えよう。

今日図書館はその使命をよく確認し教育の全体構造の中で統合的に機能することを何よりも尊重すべきである。図書館資料の充実、検索方法の近代化、ユーザーの自主的図書館教育(狭義)などの上に、何よりも各人が主体的に人格形成にはげむ教育活動全般の中で図書館が心臓のように重要な存在として位置づけられ機能するよう実行する勇断が望まれよう。そのような教育的発想の転換こそ今日の急務と言えよう。

国際化時代を迎えすぐれた世界市民の育成を図るべき先進国、とくに生涯教育の面で世界の模範とされる立場の日本の教育に見直しの好機を持ってL.Y.Lは教示しているように思われる。

私は本年4月から微力ながら大学附属図書館長兼務をお引きうけしました。就任につきましてL.Y.Lなど図書館教育について大きな努力を払って下さった先輩の方々の努力のあとを想起し、今日のわれわれがなすべき任務を確認し、忠実に図書館の仕事を進めて行きたいと考えます。それには今こそぞって「図書館が学校教育の心臓」と言われる真意を自覚し教育の質的再点検を行い教育全体に有機的に奉仕しうる図書館づくりにはげみたいと思う。(教授)



中国の小学生守則について

塚 田 清 策

1 小学校の先生のお五か条

最近中国を訪れた友人が中国の教師として守るべき五か条を知らせてくれた。

- (イ) 備 科 (教える準備をしっかりとる)
- (ロ) 上 科 (授業を指導工夫するために努力する)
- (ハ) 批改作業 (子供に宿題を出す)
- (ニ) 補 導 (おちこぼれないようにする)
- (ホ) 家庭聯系 (家庭訪問を随時やる)

2 小学生守則 (原文)

- 一 热爱祖国, 热爱人民, 好好学习, 天天向上。
- 二 按时上学, 不随便缺课。
- 三 专心听讲, 认真完成作业。
- 四 坚持锻炼身体, 积极参加文娱活动。
- 五 讲究卫生, 服装整洁, 不随地吐痰。
- 六 热爱劳动, 自己能做的事, 自己做。
- 七 遵守学校纪律, 遵守公共秩序。
- 八 尊敬师长, 团结同学, 对人讲礼貌, 不骂人, 不打架。
- 九 关心集体, 爱护公物, 捡到东西要交公。
- 十 不说脏话, 有错就改。

3 小学生守則の釈

- 一 祖国を熱愛し、人民を熱愛し、喜んで学習し、毎日毎日向上する。
- 二 時間をしらべて登校し、決して欠席しない。
- 三 専心講義を聞き、真面目に仕事を完成する。
- 四 鍛煉した身体を堅持し、積極的に文娛活動に参加する。
- 五 衛生を講究し、服装を整え、地に痰をはかない。

六 労働を熱愛し、自分でできることは自分でする。

七 学校の規則を守り、公共の秩序を守る。

八 教師と長上を尊敬し、同級生と団結し、他人に対しては礼儀を守り、人の悪口をいわず、人をたたかない。

九 集団に心をよせ、公共物を大切にし、品物を拾ったら公に渡す。

十 うそを言わず、あやまちがあれば直ちに改める。

4 小学校守則と儒教との関係

第一条

一 祖国熱愛

祖国とはその国民の生れた本国即ち祖先の国を意味するもので、この守則よりすれば、中国の国家を指すものである。国家なる語は、古くより用いられ、易繫辭伝下に

治而不忘乱、是以身安而国家可保也

と見え、又孟子にも

人有恒言、皆曰天下国家、天下之本在国、国之本在家、家之本在身 (離婁上)

と出ている。その国民である限り自己の国家を愛して護るのが当然の義務であるが、この国家を熱愛する項目を最初に出してあることに注目しなければならぬ。国家は最も強固なる集団であって人類の寄り所とする団体であるが、中国の国家方針としてこの祖国を熱愛することを第一においたことは、如何に国家の存在を重視しているかがわかる。儒教においては古くより国家を重視してその平和を保つために幾多の説を挙げている。その著しいものが大学の書である。

物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心

正、心正而后身脩、身脩而后家齐、家齐而后
 国治、国治而天下平、自天子以至於庶人、壹
 是皆以脩身為本（教一章）

この文に見える天下は中国の国家全体を指し
 国は諸侯の国を指すものであって、天下国家
 を愛しその平和を実現するには、国民各自の
 脩身が本であることを説いている。

二 熱愛人民

人民なる語も古くより用いられ孟子に次の
 如くに出ている。

諸侯宝三、土地・人民・政治、…（尽心下）

人民とはその国の住民を指していることは明
 かである。その住民は同一国民として相愛し
 て平和を保つことは国家統合の上に於て重要
 なる事項である。特に今日の中国の如きは漢
 族以外に数十の少数民族が存在する国におい
 ては尚更のことである。儒教に於ては特に民
 衆を愛することを以て仁の実行として尊重し
 ている。論語に

子曰弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆
 而親仁、行有余力、則以学文（学而）

と見え、孔子が汎く民衆を愛することを仁に
 親しむと直接述べている。

三 好好学习

学習の語は論語の開巻第一に

子曰学而時習、不亦説乎（学而）

未だ知らないことを学び時々復習すること
 によって毎日進歩することは誠に悦びに堪えな
 いことである。そこに学問を好む、好学の念
 が生じて来る。故に論語には好学の語が多く
 見える。

四 天天向上

天天向上とは毎日毎日学問が向上すること
 で日進月歩である。孔子は顔回を賞して次の
 如く述べている。

子謂顔回曰、惜乎、吾見其進也。未見其止
 也。（子罕）

孔門第一の秀才顔回が早死しているのもそれ

を惜んでいる。その学は日に日に進歩して止
 むときがないのを見て孔子は感服している。
 学の日進月歩は、孔子の大いに望む所であっ
 た。

第二条

第二条の意は、要するに授業に欠席しては
 ならぬということである。このことについて
 論語に一つの説話がある。孔子の弟子の宰予
 が孔子の所に勉強に行っていたが、ある日昼
 寝をして欠席した。これに対して孔子は次の
 如く述べている。

宰予昼寝。子曰朽木不可彫也。

孔子は宰予を批評して彫刻もできない朽木の
 如きものであるとし、最低の評であった。宰
 予によって人の見方を替えたという。これは
 叱責の最高のもというべきである。現代の
 学校教育に於ても欠席はその成果をあげるに
 は障害である。故に中国の学校は欠席を重視
 している。

第三条

第三条の趣旨は学習の方法についての規則
 である。

一 専心聴講

学問を行うには第一に専心でなければなら
 ぬ、怠けることは学習の大敵である。孔子が
 「これを語りて惰らざる者は夫れ回か（子罕）」
 と述べて顔回の専心学習に努めている点を賞
 している。故に「朝に道を聞けば夕に死すと
 も可なり」（里仁）とも述べている。

二 認真完成作業

この語は作業を最後まで成し遂げて完成を
 期するものである。

第四条

本条は身体と文化活動への積極的参加であ
 る。

一 堅持鍛煉身体

身体については儒教の経書には説く所少く、
 僅かに孝経に次の語がある。

身体髮膚、受之父母、不毀傷孝之始也
(開宗明義章)

身体の強健、鍛煉は孝の第一条件となる。

二 積極的参加

儒教は特に実行を重んじ言行一致、更に先行後言を理想とする。

先行、其言而後從之。(為政)

君子恥其言之過其行也(憲問)

第五条

本条は衛生、酒煙に関する内容であるが、儒教に於ては衛生的に関することは余り記述した部分は少ない。論語に於て食事について次の語が見られる。

祭肉不出三日、出三日不食之矣(郷党)

祭りに用いた犠牲の肉は尊い食事であるから三日以内に食する例となっている。若し三日を経過した際は肉は腐敗する為に食することを禁じている。これも一の衛生と見ることができよう。

第六条

本条には積極的に労働に参加することが述べられている。

一 熱愛労働

古代においては労働の語は、勤労の語が用いられていた。

書経の金縢篇に

昔公勤勞王家、(金縢)

と見える。この文は周公が、武王の死後、摂政として周王室の建設の為に勤勞したことを述べたものである。また書経の無逸篇に、

相小人、厥父母勤勞稼穡、厥子乃不知稼穡之艱難。(無逸)

とあって父母は農事に勤勞しているが、その

子は父母の艱難を知らないことを述べている。古来皆勤勞を尊重していることが知られる。

第七条

本条は学校の規律、社会の秩序、国家の法令を遵守すべきことを規定している。

第八条

本条は他人即ち師長・同学・一般人に対する道徳の教示である。

一 尊師

「三尺去って師の影を踏まず」とは師を尊敬する具体的方法であって古来より伝えられた言である。

第九条

本条は集団と個人及び公共物に対する道徳が示されている。

一 熱愛集体

集体は集団であって、集団には大小多くの種類があり、小は家庭から大は国家に至るその間に様々な集団がある。その中で国家は大きく又最も強力なる集団である。中庸に
為天下国家、有九經……。

この九經を挙げたのはその天下国家を最も平和に理想的に統治する方法を挙げ、その天下国家を熱愛する意志に基礎をおくものである。

第十条

有錯就改。

あやまちがあれば直ちに改める。

以上十箇条について儒教との関係を記してきたが、何れの条においても儒教との関係が存在している。現在中国では共産主義を採用しているので表面には儒教を説いていないが、その道徳の根底を為しているものは儒教であることが知られる。(教授・国文科長)



膝栗毛再会

高木秀世

中学時代の恩師が、善光寺道中続膝栗毛の註解書を出版したというので、先日私のもとにも届いた。私をはじめて十返舎一九の膝栗毛を読んだのは、まだ若かった昭和 14 年頃である。すでに故人となられた京都大学の頼原退蔵先生の江戸文芸の講義を何回かお聴きする機会があって、江戸文学に興味を持ち、読みあさった時である。その後、膝栗毛を読むことはなかった。このたび恩師の出版ということで、再び膝栗毛を読むことを得て、大変面白く読んだのである。ことにこの九編上下の善光寺道中続膝栗毛は初めてである。今日の世相と併せて読むとき、弥次郎兵衛喜多八の兩人が、相変わらず滑稽や失敗をくり返しながら楽天的に旅をしている様子や作中の人物たちに魅力を感じずる。兩人の無責任な失敗や大きないたづらも、遊びの世界として笑って読める要素があるからであろう。

善光寺道中膝栗毛は、木曾街道続膝栗毛に続くもので、松本から善光寺に至るまでの道中である。弥次郎兵衛喜多八の通った道は、本文によると

「松本より善光寺へ。近道とききたる。糸魚川街道に出。池田の駅に一宿し。大町の宿を打過。たどりゆくに。村はづれの茶見せあ

るに立寄」とある。

当時、松本から善光寺へ向かう道は、本街道である麻績から猿が馬場峠を越えるのが普通であったようである。しかるに兩人にこの道筋を歩かせた理由として、作者一九は「糸魚川街道を下って大町そして新町への道は、至ってめずらしき絶景の地があまたある」と言っている。また凡例の中で「予も一とせこの街道を經ておもしろくおぼえたるまま巻中の騷士も此道に赴しむ」と言っている。

弥次郎兵衛喜多八は、私どもの熟知している信州路を、洒落をとばし、失敗をし喧嘩をし夜道の妖怪や天狗にきもを冷やつつやと新町の宿にたどり着き、ほっと息をつぐのである。新町の宿でも、同宿の上方の商人と喧嘩をして相手に怪我をさせ、詫言証文を書かせられる。

道中この地方の特色ある食べ物なども出てくる。新町の宿では、ほし蕨が汁の実に出

されるし、稲荷山への山道では、土地の人の家で、もろこし餅をふるまってもらうが、兩人にはまずくて食べられなかった。地方の暮し向きなどもうかがえて面白い。

稲荷山を過ぎて長野に向かうのであるが、稲荷山から長野の町にはいる丹波島あたりの当時



の様子や長野の町の繁昌ぶりが、まことに生き生きと描かれていて、昔の姿が偲ばれる。本文によると

「それより丹波じまを打すぎ。犀川のわたしにいたる。ここのわたし船は。両方の川岸より綱を引きはり。それをつたひてわたるふねなり。……

かくて善光寺の町にいたれば。とりどりの商家軒をならべて繁昌いうばかりなく。両側のはたごやより。はたごや「ハイ尻垂屋じゅう兵衛でござりやす。とまってござんしねへか」とある。

青木島から犀川を渡るところは、現在は鉄橋となっており、朝夕の車の混雑はすさまじいが私の子供の頃は木橋が架けられていた。弥次郎兵衛喜多八が犀川を渡った文政の昔は橋でなく渡し船が往来していたわけである。

長野にはいると、旅館の番頭たちが口々に客を呼ぶ声、誇り高く宿の名を叫んで客を招く有様(やどや みなみな じぶんの名をよびたてりよ人をよぶ、此所のふうなり、とある)旅人との宿賃の交渉における言葉のやりとり、その動作や情景が、ほう沸として如実に表現されていて、まことに興味深い。長野の町にはいった二人は、爛鍋屋長四郎の宿に泊まりを決めて、そこに荷物を置いて善光寺に参拝し、諸堂をくまなく巡拝、お戒壇めぐりもすませて、先に決めておいた宿に帰るのである。その夜、宿屋の年増娘と投宿中の旅人との恋仲となり、心中しようかと相談し実行しようとするのを盗み聞きした喜多八が、心中の現場を見ようとして、また大失敗をし大騒ぎとなり、心中の邪魔をする羽目となる。

宿屋の番頭たちが旅人に呼びかける言葉の、「おとまりなさいし」「おはいりなさいし」や宿の年増娘と男との会話の中にも「かつかさまがいひすから」「外の男はやあでござりす」などに、この地方特有の方言、即ち川中島松代地

方を中心に昔よく使われ、現在も使われている松代のま抜けことばが使用されているのも大変面白く、現実感がある。

作者一九が、予も一とせ此街道を經過おもしろくおぼえたるままと言っているように、一九は統膝栗毛を書く前後何回か、この地方を実際に歩いて、その地方の風土や地方の人々の会話や事件を写し体験しているのである。したがって、単なる推量で書いているのではないことがわかる。爛鍋屋長四郎の宿での娘の心中未遂も実は大笹駅黒岩氏に止宿した時に聞いた心中、男女の相対死の未遂に終わった話を、善光寺の泊まりのところに持ってきたものである。作者一九が、実際に見聞した体験を写生し組みたてたところに膝栗毛の如実感も、生き生きとした新鮮さも読者に伝わってくるのであろう。二人の泊った爛鍋屋もおそらく一九の創作の宿名であろうが、現在も長野市に、鍋屋田の地名があり、鍋屋の田んぼのあったところとの意味があると聞いている。それを知れば、この宿名も単なる駄洒落ではなく、根拠のあるものであり、読者を予想したものであろう。

久しぶりに膝栗毛に再会し、信州路の街道の描写と共に、信州路を洒落を言いつつ、威張ってみたり、ぐうたらをしたりして行く二人の旅に、改めて親しみを感じると共に、どこまで定住もできず、歩きつづける二人の人生に寂しさをも感じさせる。文芸としての評価の高低は問われるとしても、単なる滑稽小説をこえて愛読することができた。

私どもの短大にも国文科が新設され、数多くの国文関係の図書がはいり充実をみた。国文科の学生は勿論だが、幼児教育科の学生も古典に触れる機会が多く持てて有難いことである。

※滑稽本 善光寺道中統膝栗毛

足立惣蔵著

(信教印刷出版)

(講師・幼児教育科)



敬 語 随 想



青 木 千代吉

◇ 研修旅行の中から

9月21・22日と、松島・平泉への職員旅行があった。東北新幹線の旅を楽しんで仙台駅に降りると、そこに私たち一行を案内してくれる観光バスが待っていた。そのバスのガイド嬢の説明はとりわけ印象的というわけではなかったが、少しでも旅を楽しくと願って話してくれる心配りがうかがえて、もの静かなその人から共に好感の持てる人だった。

しきりにしゃべってくれるこのガイド嬢の話、私はその内容から全くズレたところで一心に聞いた。もう30年も前に、この地で1週間にもわたってアクセントを中心とした言語の調査をしたことがあったが、今このガイドさんの話しことばに接してみて、そのころと少しも変わらぬ1型アクセントであることが懐しく聞かれて飽きることがなかった。今この地のアクセント体系が、若い世代から変化しつつある、という報告も承知しているが、その将来も思いながら得難い体験が持てた事が有難かった。

旅行の第2日め、このガイドさんの話しことばの中に、次のような敬語表現を見出した。

- ・少し進まれますと、ちょっときつい坂がありますが頑張って行かれて下さい。
- ・カメラを持たれて撮影なさレルのもいいですね。
- ・時間いっぱいゆっくり見ラれておいで下さい。
- ・右手前方を見ラれて頂くと森があります。
- ・気を付けられてお帰り願いたいと思います。

例を挙げるのは以上にとどめるが、十数例の記録を得て、私には旅の印象と共に収穫の多い旅行であった。

このレル・ラレル敬語は、後に記すように戦後の日本が『これからの敬語』において、一般に使われていくことを目ざすべきものとして期待されていたものの一つであった。しかしこのレル・ラレルは、やや簡略な敬体表現であるというような意識からか、なかなか期待されたようには普及しないものであった。

ただ親しい間からの女性同志の間では、

- ・そこへ掛けラれて。(お掛けになって)
- ・さあ上がラれて。(お上がりになって)

というようには使われてきているが、それは限られた関係、場面で用いられるに過ぎないものと扱うべきものようである。

ところがこのバスガイドさんは、職業上の改まった対人関係の場面で、構文的には述語修飾格にレル・ラレル敬語を用いて話しかけのセンテンスを形造っているのである。私は、この地方の、少なくともこの社会には、このような敬語法が発達していることを見出して驚きを覚えたのであった。

◇ テレビ・ラジオの視聴の中から

戦後の国語政策の一つに、国語審議会が昭和27年に議決し、文部省が発表した『これからの敬語』がある。これは敗戦後の日本が新しい時代の創造をめざした言語生活の在りようを探索する中から求められた一つの帰結と受け取れるものである。そしてその基本方針として、これからの敬語の在りようは、旧時代の敬語の行きすぎを改めて、できるだけ平明簡素でしかも人間の尊重、相互尊敬の心を基調としたものでなくてはならない、ということを挙げている。

これはまことに妥当な見解であった。それから30年、それは決して短い年月ではない。社

会の様相は一変した。敬語にもいろいろな変化があったがその具体はすべて省略しなければならない、というよりも、それは本稿の目的ではない。ただこの年月の間に、聴覚文化、映像文化が驚異的な発達普及をしたことが、「敬語」という文化現象に大きな影響を与えていることを十分認識しておきたい。

現代は、デス・マスという敬語助動詞の全盛期である。平明簡素であり、かつ相互尊敬の心を大切に考える敬語の在り方をめざすとき、このデス・マスという語が基調となった談話生活は望ましいものであるが、現況ではこのマス・デスに次のような問題がある。

マスの氾濫

1. もう何年も前のことであるが、「よど号」という飛行機がハイジャックされたことがあった。飛行機乗っ取りの最も初期の事件であった。そのテレビ放送のアナウンスの中で、「よど号を乗っ取りマシた犯人は……」と言って、犯人の条件提示の内容を紹介していた。それを聞いて私は「オヤッ」と思った。アナウンサーはこの場合放送原稿全文を丁寧体でまとめたわけ、その立場からは「マス」を使うことは文法的には誤っていない。けれども大罪を犯した犯人を修飾する句に「マス」という敬語の助動詞を使うことは、文章態度として適切ではない。「よど号を乗っ取った犯人は……」という把握と報道こそが、この事態に対する公正で客観的な言語態度であったはずである。

2. 国会・地方議会などの議場において、よく聞かれる答弁に次のような型がある。

「〇〇先生がご指摘されマシた件に就きマシては、当課といたしマシても十分に検討を重ねマシて決定いたしマシたものでございマスが、なお着工いたしマス場合におきマシては更に検

討を加えマシて万々遺漏のないように進めて参る所存でございます。」

何とまあ煩雑極まりない丁寧体であろうか。このような「マス」の氾濫は、ラジオ、テレビの対話・対談形式の実況報告、報道に現れるもので、何とも聞きにくいものである。こういう言い方は、マスに寄りかかった揉み手の場合とまたマスにたよって次の発話を模索しながら言葉をつづける場合とがあるようだが、いずれにしても平明簡素であり的確で味わい深いという言語理想を逸脱した不見識によるものと言うほかはない。

デネスの乱用 (56年度甲子園高校野球大会の中継放送の録音から)

A アナウンサー

M 解説者

A Mさんデスネ、いよいよデスネ、最終回となりましたデスネ。最少点差の1点をデスネどうやってはねかえすかデスネ、それが見どころデスネ。

M そうなんです。T高校としては気力をこめてデスネ、好球必打でくるはずですからデスネ、この回は球趣満々という場面になりましたですね。

「ですね」という語は文末に用いられて、その一文を統轄する陳述性を持つ語であるはずのものだが、現状では例示の場合のように間投助詞として、文節の切れめに乱用される傾向が強い。これはラジオ・テレビの実況報告、取材報告が、対話・対談の形で行われる場合によく聞かれる。とりわけ話者がせきこんでくると、このデスネの現われ方は多くなる傾向がある。もともと間投助詞は「話しかけ」の機能を持つ語であるから、このデスネも相手に話しかけ・呼びかけ、相手を引きつけて、という気持の現われであることはわかるが、その不必要な乱用は

デスネに寄りかかって、話すことの展開を瞬間的に図っていく場合に多く現われるようでありなお押しつけがましく、多少の気取りをもって話す、というような言語態度によるものと受けとれる。上に例示したようなデスネは、すべて省略して、そこに瞬時の間を置くことが美しい表現への道であると思う。このようなデスネの乱用は自らの話す表現の品格を著しく損ねていることを思うべきである。

◇ 終りに

仙台に行って気がついたことは、あの地の観光案内という社会に、どのようにして現在の共通語とは違った敬語表現が発達しつつあるか、ということであった。言語の発達は、それに対

する価値意識のいかんにかかわっている、という一般原則を思い合わせながら、私は偶然にも聞きとらえ得たレル・ラレル敬語の一用法に心をひかれるのである。

また、ラジオ・テレビを視聴しながら、いつも思うことは、この仕事に携わる人々に、自らの言語態度をいつも厳しく問いつけてもらいたいということである。そして市民・国民の、言葉そのものへの探求の眼が深いか否かが、日本語を世界の中の日本語として育て得るか否かの鍵となっていること、言ってみれば自らの言語生活そのものの凝視と研究が、そういう意味で新たな国民の課題でなければならないと、しきりに思わせられるのである。

(講師 国文科)

あやさんへ

夫神岳のふもとの温泉の里に向ってマッチ箱のような白い電車がコトコトと行く。生島足島神社の森や塩田の山、そして続く田んぼ、どこを眺めても、この塩田平はすっかり初夏です。学園の裏山の林は緑の風がふきぬけています。

あやさんも待望の高校へ入学し心踊る毎日を通しておられることと思います。衣替えをした高校の通学服が、すっかり身についたこの頃でしょう。この前帰省した時は時間がなくて学園の様子も十分話せなかったのが残念に思います。今日は特にすることもなく少々手持ちぶさたなので学園の様子的一端を書きたいと思います。

今涼しい風が窓から吹き込んで来ています。先程の洗濯物がよく乾くでしょう。

学園に入った左側に立派な図書館があることは知ってますね。ほら学園紹介のパンフレットにあったでしょう。ちょっと高床に見えたあの建物です。当学園自慢の図書館です。明るく、さわやかで蔵書数も多くさすが高校の図書館と

幼児教育科1年 土屋長子

は違います。高校時代は本当のところあまり図書館へ行きませんでしたよ。行っても自分の好きな小説を借りるぐらいでした。この学園へ来て間もなく、あることを調べる必要があったので初めて入ってみました。内部の立派なのに驚きました。1時間程でしたが調べ終り満足感にひたり外へ出ました。外へ出て図書館をふり返ってみた時、自分は本当にこの学生なんだなあと誇りみたいなものを感じましたよ。学生として勉強する機会と場所を与えられている特権意識の様な気分でした。

私が高校の時は本と言えば小説を読むくらい。小説といっても推理ものが主だったけど。時々父の書棚から文学全集をぬき取って読んでくらしいですね。だがここへ入学して以来図書館へ行くねらいが少し変っている様ですよ、それはね課題・問題を調べるために行くことが多いのです。今までは図書館と言えば単に本が沢山ある所、本を借りる所というイメージが強かった

のですが、それは認識不足でした。図書館へ行かなければならない、行く必要を持つ、目的を持って行く、そしてそこはそれを解決してくれるのです。

私がこの学校に合格した時、父がよく私に言っていたね、「学生は社会勉強も必要だけど学問をすることが本分だ。」と、本当の学問で何だか私にはよく分からないけど、この図書館に入っていると、その学問とは何かはほんの少し感じられるような気がするのです。

少し学生ぶってしまいましたね。

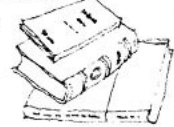
あやさんの高校にも多分立派な図書館があるでしょうね。今私が感じていることは、あやさんに何かの参考になると思いますよ。

明日もある調べたいことがあって図書館に行くつもりです。でもこうして、あそこへ入ることを幸せに思っています。

久しぶりに手紙を書いたら少し肩が凝ってしまいました。初夏の風って本当に気持ちがいいですね、私の部屋のシャンデリア(5千円の蛍光灯は私にとってシャンデリア)が少しゆれています。父も母も元気のことと思います。夏休みになったら帰ります。あやさんも高校生活をエンジョイして下さい。

さようなら

1983 初夏 下宿にて



私と本との関わり

あなたは、忙しい時やテストの前などに、むしろに何か他の事をしたくなることがありますか。私は、いつも本を読みたくります。暇なときは、たいして見向きもしなかったのに寝る時間をおしんでまで、本を読んでしまうのです。どうしてなのか、とても不思議ですが、何か、ひきつけられるものがあるからだと思います。

一冊の本をじっくり読んで、頭の中に内容を入れる、ということは、私はできません。乱読そのものなのです。読んでいる、というよりも、ながめている、といった感じで、本の数だけをこなしている感じです。でも、その雰囲気、とても好きなのです。テレビを見ている感じです。頭にはいらぬ分、いいなと思ったら、もう一度読んでいます。これは、本でなくてはできないことです。

本の内容で、自分にとって大切だ、と思うところが、たくさんあります。すぐに忘れてしまうのは、もったいないことです。私は、短大に

幼児教育科 2年 上野 恵美子

はいて、読書ノートをつけ始めました。書名、著者、出版社名、それと、いい文章だと思ったところを書きとめるだけのものです。しかし、これを読み返ただけで、本を読んだ気分になるのです。これは、授業中にすすめられて始めたものです。保育関係の本を読んで、いろいろ書きとめた後、特に、子どもの言葉で、はっとしたものを見つけて書きとめることができたときは、とてもうれしくて、たまらなくなります。実習だけではなく、本の中でも、子どもと話ができるんだなあ、そんな感じがします。1人1人、自分なりに読書ノートを作ってみたら、きっと楽しいものができると思います。

本は、手軽に持ち運べるので、いつでも、どこでも読むことができます。初めは、自分のお気に入りの作家の本から、そして、どんどん読み広げていけば、とても大切な、頭の中の参考書の一部になると思います。読書の秋です。何か、心に残る本を一冊、読むことができたなら、いいなあ、と思っています。

~~~~~読書とテレビ~~~~~

就職あるいは進学の種類に、趣味「読書」と書く人が多い。しかし、年々本から離れる一方である。周囲が余り読まないから、テレビの方がおもしろいから、理由は色々あるだろう。趣味と言えるほど、本を読む人は少ないと思う。

テレビは害だ、無益だ、見るものじゃないとやたらに非難する人もいる。そう思うのも結構だが、その独自の考え方を全部にあてはめようとしても無駄である。それで影響をうけた母親等から「見てはいけません。」と文句を言われた者は、いい迷惑である。少なくとも、おもしろかった、次が楽しみだと害にはなっていないと思う。テレビで育った世代の私だから、こんな考え方をするのもかもしれない。でも、番組づくりに生活をかけて、一生の仕事にしているのに、害だと言われたら、見てくれなかったら、その人たちはどうしたらいいのだろうか。

しかし、テレビだけではやはりよくない、本だけでもよくない、両方ほどほどに。大変に難しい。本の好みも片寄って趣味に走ってしまう。私の父はよく本を買ってくる。本であふれている部屋を見て、母は文句を言う。同じジャンル、特定の作家、何の役にたつのかとブツブツ言う。確かにほこりをかぶって数ヶ月の衰れた姿の物もある。「後々まで残るのだから、この位はいいじゃないか」と父の弁。相方の言い分は、それぞれ納得できるから口出しは出来ない。マンガばかり買って！テレビばかり見て！と矛先をこちらに向けられてしまう。難しい。

読むのが速いねとよく言われる。私の場合、それだけである。活字を目で追うことが速くて内容は全くわからない。読むのも速いが忘れるのも速い。

読みなさいと言われる前に興味があれば、自分で買ったり、友達に借りたりして読むもので

国文科1年 中島秀子

ある。授業中でも、テレビの時間を少し削っても。ところが、「〇〇」を来週中に読んで下さいと指定されると、最初の数ページを何度も何度も繰り返し読むだけで仲々先へ進まない。私は自分で読もうという意志がなければ、全く手につかないのである。活字を目で追うだけの暇つぶしになってしまっている。

同年代に近い年齢の人の書く文章は読みやすい。無理なく読み進める。年代は違ってもおもしろいものもある。ベストセラーになるような本であろう。明治の頃の本は難しい。多少の知識が必要になるし、無知な私には読みにくい。

赤毛のアンの想像の世界にあこがれた。推理小説やSFにこった時期もある。私の読む本のジャンルは、ばらばらである。しかし、その読む気になった源は、単純である。源氏物語はマンガで読んで、古典にも目を向けようと思ったが、無教養のために思っただけで終わった。テレビで古代遺跡に関する番組があり、そこから興味を持ったが、持ったままであった。中途半端でも本を読もうという気になった。テレビだってバカにはできない。テレビや映画を見て原作を読みたくなることもある。ささいなことでも読む本が見つかるものだ。

おもしろくない文、難解な文を読まなければならなくなった時も、不平をブツブツ言いながら読む。この作者は何を考えているんだ、もっとわかりやすく書けと一人で怒っている。読みにくいのは作者の責任だと、人に転嫁している。

私が「読書をしましょう」と言っても、他の人が即、行動に移す訳ではないから、勧めようとは思わない。ただ、テレビにしても本にしても、興味もないのに見ていても無駄だから、そんなことはやめた方がいいと思う。と言いながら、意味なくダラダラと過ごす私である。

◆【図書館ガイド】◆

図書館の目録について

この図書館ガイドは、図書館を効果的に利用できるように、システムや概要、使い方等を分り易く説明するためのものです。今回は第8号の「分類」に続き、「目録」について説明します。

尚、「分類」については入学時のオリエンテーションで8号のコピーを配布してありますので、それとガイドブックの「目録の排列」の項を参考にしながら「目録とは何か」を理解するようにして下さい。

1. 図書館の目録

図書館でいう目録(Catalog)とは、一定の順序に排列、編成した図書資料のリストのことです。平たく言えば、図書館資料の個々について説明した記録を一定の順序に並べたものなのです。その点で書誌(Bibliography)とは区別されます。そして、図書館目録は、所蔵を知る、配架位置を知る等々の機能があり、各図書館ではそのため数種類の目録を用意し、その組み合わせによって機能を効果的にはたせるように作成されているのです。

2. 目録法

さて、目録には、目録作成上の必要要素があり、その書き方について統一したルールがあります。これを日本目録規則(N・C・R)と言います。このN・C・Rも国際的標準化のため、改訂が重ねられ、本学では、新版・予備版を適用しています。尚、今回の説明は和漢書目録についてで、洋書の説明は省略します。

3. カード目録の使い方と排列のしくみ

カード目録の記入内容については、ガイドブック8Pに図式してありますので省略しますが問題は使い方と排列のしくみですので、それを説明します。

(1) 書名目録

書名が確実に分っている場合利用する目録です。カードの上部にローマ字でタイプされていて、字順排列<書名全体を一単位と考えてABC順に並べる>したものです。そのローマ字綴はヘボン式ローマ字綴法が採用されています。皆さんの知っている訓令式と少し違う点がありますので注意して下さい。例えば、シ(Si)は<shi>、チ(ti)は<chi>となります。同

音異字は、片仮名、平仮名、漢字<字画数少→大>の順、異著者同一書名の場合は著者のABC順、書名中の頭文字、略語は省略形のまま、数字はローマ字読みをしたもの<1983→Senkyuhyaku……>とします。又、長音は<^>を省略した母音字のまま<入門=nyu→nyumon>で配列されます。書名中の外国語・外来語は原綴にもどさず、日本語読みのローマ字化したものです。<アメリカ→Amerika>そして、書名は必ず一つとは限らずシリーズもの、全集ものは全体の書名(総合書名)からも、個々の書名(各巻書名)からも検策出来ます。つまる音は最初の子音が重なります。……等々まだ細かい規則がたくさんありますが、専門的になるので略します。主な注意点は以上です。

これらは著者名目録にも共通しています。

(2) 著者名目録

著者名が確実に分っている場合の目録です。西洋人名はフルネームの綴が分っていないと探せません。又、その著者(人物)について書かれた本(伝記、評論)も、その被伝者名のフェイルから検策出来ます。この場合注意する点は①姓、名の順に記入されていること。——日本人名は問題ないのですが、普通、西洋人名は名、姓の順で呼称されていますので、目録上は姓、名の順に転地します。<W・シェークスピア→Shakespeare, William>尚、東洋人名は日本語読みしたものをローマ字綴で表記し、母国語読みはしません。<毛沢東→Mo, Takuto>

そして、姓、名を各々一単位として並べて、同姓が一ヶ所に集るようになっていきます。同姓の中は名のABC順です。又、接頭語の省略形

は完全形綴になっています。②団体著者は省略形と日本語の正式名称両方から検策できます。〈N・H・KとNippon ho so kyo kai〉又、書名中にもたくさん出てきますが、「日本」と名のつく団体著者は、図書館ではすべて〈Nippon〉です。正式呼称がどうあれ〈Nihon〉ではなく〈Nippon〉です。矛盾を感じるかと思いますが、「日本」を一ヶ所に集中するためです。但し、書名中で「日本書紀」「日本書紀」等は〈Nihon〉です。書名の読みで特殊なもの(特に古典に多い)は「国書総目録」等によっています。

③姓と名との間の助詞「ノ」は省略する。中世までの人名に慣用される姓、名とのノは表記しません<山部赤人→Yama be, Akahiko>但し、例外もあります。〈紀貫之→Kino, Tsurayuki〉西洋人名で原綴がわからないときは「西洋人名辞典」等を参考して下さい。

又、著者も、書名と同じく長音は母音字のみの表記です。〈毛利=Mori も森=Mori も同じになります〉

(イ) 分類目録

主題から所蔵資料を探す場合の目録です。N・D・C(日本十進分類法)に従いカードが排列されています。(カードの左肩の番号順)N・D・C 8版に昭和53年以後移行していますので、それ以前の7版との相違は参照カード(黄色)(……を見よ、……をも見よ)が分類番号の手前に入っています。

(ニ) 書架目録

分類目録と同じくN・D・C順に排列されているのですが、本学図書館の書架に本が並んでいる通りにカードが並んでいるわけです。つまり一般図書館の他に、参考図書、学術文庫、岩波新書、児童書、郷土図書等、それに洋書とそれぞれに区別され、中はN・D・C順となっています。

4. おわりに

さて、閲覧室南側にある8台のカードケース中には、以上のような細かい規程に従いカードがおおよそ15万枚排列されています。皆さんの中には目録カードをひくことに馴染みのない人

が多いでしょうが、少しゆっくり本をさがす気になって使い方を覚えて下さい。

図書館の目録がカード様式になったのは19世紀終り頃ですが、カード目録がほとんどの図書館で採用されているのは検策(Finding List)の役目が大きいからです。又、くり込み等が便利な点もあげられます。

他方、近年、コンピューターの普及で、図書館にもカードに変わり、コンピューターが検策をしてくれる時代がやってきます。国立国会図書館は現在約450万冊の蔵書を誇りますが、納本される本に対し、JapanMARC(目録カード上の記載事項を入力したデータベース)を作成しています。このように利用者は、カードをひかないで端末機のディスプレイに所蔵目録を写し出して探せるようになるのです。又、文部省は1985年をメドに全国図書館ネットワーク作り(当面は主要国立大学図書館をネックに)の構想があり、準備段階に入っています。つまり、コンピューターでオンライン化することによりどこかの大学図書館に、何という図書資料があるかが即時分るようになるというしくみです。

このように大規模図書館の情報活動に対し、本学のような小図書館でもコンピューター化は無関心ではられません。近い将来、近く国立大学拠点校と回線を結ぶことになるでしょう。

何はともあれ、現在ではカードをひいて必要資料を探す他ありません。そして、とにかく、わからないことは係に聞くことです。有効な利用を期待するものです。(長張)

——ちよつと一言、私の事——

甲田 ゆかり

背筋をピンと伸ばしすまして並んでいる本達に「これからよろしく!」とつぶやいたあの日から、はや半年。社会人としてのスタートは、我が母校。学生時代何気なく見のがしてきた本達も今はかけがえのない私の宝。再び与えられた勉強の場で悔いなく過ごしたい今日この頃です。

***** 寄贈図書案内 *****

— 昭和 58 年度 主な 寄贈 —

信州文学碑散歩(福沢武一著)他 18 冊	国 書 刊 行 会	福沢 武一先生
棄てられた四万三千人(三田英琳著)他 3 冊	三 一 書 房	三田 英琳先生
児童養護	川 島 書 店	竹内 要先生
高橋 渡詩集(高橋 渡著)他 2 冊	芸 風 書 院	中山 渡先生
装いせよわが魂よ(高橋たか子著)他 5 冊	新 潮 社	須永 淑先生
地図で見る新宿区の移り変わり	東京都新宿区教育委員会	西沢 爽先生
幼児の運動教育	学 術 出 版 社	飯田 正江先生
BILOGY OF THE NOTOPTERA(安藤裕著)	KASHIYO-INSATSU	安藤 裕先生
風の伝説(上野良夫著)他 8 冊	有 朋 舎	北川原平造先生
北国街道本海野宿(武者秀雄著)	海 野 史 研 究 会	武者 秀雄 氏
歌集一杯水(細谷明德著)	信 毎 書 籍	細谷 明德 氏
社会教育論序説(黒沢惟昭著)	八 千 代 出 版	黒沢 惟昭 氏
わらうことがしゅくだいだって(はまみつを著)	金 の 星 社	はまみつを 氏
フィレンツェの美術 1~6 巻	小 学 館	藤沢宗一郎 氏
いてふ本 56 冊	いてふ本刊行会	五十嵐幹雄 氏
幼児教育 一すこやかな成長を願って一	白 文 社	長野県短期大学 幼児教育科
山本 鼎 (小崎軍司著)	山 本 鼎 記 念 館	上田市山本鼎記念館
長野県教育史	長野県教育史刊行会	長野県教育委員会
郷土の民俗 民話	上 田 市 立 博 物 館	上田市立博物館
華北の交通史(福田英雄著)他 1 冊	T. B. S. プリタニカ	株式会社長野放送
学習社会の成立と教育の再編	東 京 大 学 出 版 会	地域社会研究所
荒唐するアメリカ(P. チョート & . S. ウォルター)	開 発 問 題 研 究 所	日本土木工業協会
現代日本画の世界 他 1 冊	北 沢 美 術 館	諏訪北沢美術館
豊かな心	い と ぐ る ま の 会	上田いずみ園
八十二銀行五十年史	八 十 二 銀 行	八 十 二 銀 行
潤生一三婦寮・尚和寮 百年の歩み	三 婦 寮 ・ 尚 和 寮	三 婦 寮 ・ 尚 和 寮
藤村学園八十年のあゆみ	藤 村 学 園	藤 村 学 園
華頂短期大学三十年のあゆみ	華 頂 短 大	華 頂 短 大
安城学園七十年誌	安 城 学 園	安 城 学 園
泉 鏡花事典 他 3 冊	学 芸 図 書	紀伊国屋書店

編 集 後 記

国文科の出版とともに新館長を迎えて、初心にかえり、ひたすら歩んできた実り多い年であった。今年をかえりみつつ図書館だよりをまとめる。先生方には貴重な御寄稿をたくさんいただき、又学生諸姉の協力によって、このように楽しく益するところの大きいよりの生れたことを心から御礼申上げたい。

「山眠る」という季語がある。紅葉を落しつくして、雪を頂こうとする山の、あたたかき静けさ、蓄積される自然の生命を思う。図書館にかかわる多くの人が心を内へより深くひろげる季節でもあろうか。研究に勉学に一層利用されることをねがっている (須永)

上田女子短期大学 図書館だより 第 10 号 1983. 12. 10 発行

編 集 上田女子短期大学図書委員会

発 行 上田女子短期大学附属図書館